

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：24302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00423

研究課題名（和文）戦間期における環大西洋モダニズム文学の形成

研究課題名（英文）Modernist Literature Forming around the Atlantic Rim during the Interwar Period

研究代表者

出口 菜摘（DEGUCHI, Natsumi）

京都府立大学・文学部・教授

研究者番号：80516138

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究成果は論文「冷戦下に広がる荒地 プリントカルチャーと詩人の役割」にまとめ、論集『四月はいちばん残酷な月 T. S. エリオット「荒地」発表100周年記念論集』（2022年、水声社）の一篇として出版した。本論文は日本におけるエリオット受容を視野に、エリオットと『荒地』の受容を、大西洋と太平洋を跨いで張り巡らされたプリントカルチャーから考察したもので、冷戦期の文芸誌『エンカウンター』に先立って、戦間期にエリオットが編集した文芸誌『クライテリオン』がモデルとしてあったことを、両誌の編集方針から明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

文化的ネットワークを構築する媒体として、『エンカウンター』が『クライテリオン』の編集方針に倣ったという事実は、翻って、大戦間期に形成されたエリオットの文化的戦略がいかに野心的であり、かつ有効だったかを物語るものである。コロナ禍のために、当初計画をしていた英国図書館等での資料調査を実施することが難しかったが、大戦間期に軸足を置く本研究の問題意識は、第二次世界大戦後にまで射程をのばすことのできるテーマであることを明らかにした。そして本研究の根幹となるプリントカルチャーと文化形成をベースとし、よりスケールの大きな研究成果を得ることができたと考えている。

研究成果の概要（英文）：This research has been reported in the thesis: "The Waste Land Spreading During the Cold War: Print Culture and the Role of Poet." This thesis examines the reception of Eliot and The Waste Land from the perspective of print culture across the Atlantic and the Pacific, and clarifies the literary magazine Criterion which Eliot edited in the interwar period that later functioned as a model for Encounter published during the Cold War. The fact that Encounter followed the editorial policy of Criterion as a medium for building a cultural network shows how ambitious and effective Eliot's cultural strategy was. Due to the pandemic, it was difficult to conduct the research at the British Library and other archives that I had originally planned. However, this research was able to pave the way to extend the scope of the initial plan through ranging from the interwar period to the post-World War II period, and obtain larger-scale research results based on print culture and cultural formation.

研究分野：英米詩

キーワード：T. S. エリオット 大戦間期 プリントカルチャー 『荒地』の受容 『クライテリオン』 『エンカウンター』

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、1. プリントカルチャー(メディア戦略) 2. 第一次世界大戦の勃発と大戦間期、3. イギリスからアメリカへの覇権の移動、という3点から、モダニズム文学の形成とモダニズム文学の概念を再検討・再構築することを目的としている。本研究が提示する視座において、これまで個別に発展したと思われてきたモダニズム文化史とメディア史、地政的変動を接続することとなり、新しいモダニズムの相貌を提供する普及効果の高い研究となると考えた。具体的にはモダニズム文学の代表的詩人である T. S. エリオットの作品・評論、文芸活動を中心に分析をすることで、モダニズム文学が形成されるプロセスを明らかにすることを目指した。

(2) 第一次世界大戦は、従来の文化的構造や道徳的規範、さらには伝統の概念の再編成を促した。特に大戦後には、アメリカ合衆国の覇権が形成され、世界の地政図が大きく変化した。実際に、第一次世界大戦を機に、アメリカは国力を強め、「世界のアメリカ化」として、その後の世界地図を塗り替えることになる。パックス・ブリタニカからパクス・アメリカーナへと合衆国の覇権が形成されるに伴い、文化的な影響力というかたちでアメリカナイゼーションが行われた。イギリスのモダニズムが、アメリカ出身のエリオットとエズラ・パウンドを中心として形成されたことはその証左であり、かつ、アメリカ出身のエリオットがイギリスの文壇にポジションを得て、モダニズムの代表的詩人として文学史に名を残したことは、アメリカナイゼーションの文脈において捉えることができると考えた。

2. 研究の目的

(1) モダニストらが自分の理想とする文化的共同体を形成する手段として、リトルマガジンが重要な役割を担ったことを踏まえ、エリオットが編集に携わった文芸誌『クライテリオン』や、同時期の寄稿誌の文芸誌的性格や読者層を分析することで、プリントカルチャーがモダニズム文学の形成に果たした役割を明らかにすることを目指した。

(2) 前述の3つの視座を導入することによって、よりダイナミックにモダニズム文学を形成している諸要素を再検討・再構築することができ、モダニズムの新しい相貌を提供できると考えた。

3. 研究の方法

(1) 新型コロナウイルスの拡大のために、当初の計画の変更を余儀なくされた。しかし、大戦間期にみられたプリントカルチャーが、第二次世界大戦後のアメリカと日本でどのように波及したかを考察することで、遡及的にモダニズム文学の持つ文化構築の戦略性を浮かび上がらせることができた。

(2) 具体的には、1923年に創刊されたアメリカの週刊誌『タイム』や、1936年に創刊されたフォトジャーナル誌『ライフ』に掲載されたエリオットについての記事を分析することで、大戦間期からのアメリカでのエリオット受容の変遷を辿った。

(3) さらに1953年に創刊された文芸誌『エンカウンター』について、同誌がアメリカの政府機関「文化的自由のためのアメリカ委員会」や「文化自由会議」の動きと親和性を持つものであったこと、またCIAからの資金提供を受けていたことに着目し、初代編集者であ

るスティーヴン・スペンダーとアーヴィン・クリストルの思想や政治的立場、同誌の傾向を整理した。また、1958年にクリストルから編集担当を引き継いだメルヴィン・ラスキが、『エンカウンター』創刊十周年書籍で、エリオットに謝辞を送っていることに注目し、エリオット主幹『クライテリオン』が『エンカウンター』のモデルとなっていることを確認した。

4. 研究成果

(1) 本研究成果は論文「冷戦下に広がる荒地 プリントカルチャーと詩人の役割」にまとめ、論集『四月はいちばん残酷な月 T. S. エリオット「荒地」発表 100 周年記念論集』（2022年、水声社）の一篇として出版した。本論文は日本におけるエリオット受容を視野に、エリオットと『荒地』の受容を大西洋と太平洋を跨いで張り巡らされたプリントカルチャーから考察したもので、冷戦期の印刷物『エンカウンター』に先立って、戦間期にエリオットが編集した文芸誌『クライテリオン』がモデルとしてあったことを、両誌の編集方針から明らかにした。

(2) 文化的ネットワークを構築する媒体として、『エンカウンター』が『クライテリオン』の編集方針に倣ったという事実は、翻って、大戦間期に形成されたエリオットの文化的戦略がいかに野心的であり、かつ有効だったかを物語るものである。コロナ禍のために、当初計画をしていた英国図書館等での資料調査を実施することが難しかったが、大戦間期に軸足を置く本研究の問題意識は、第二次世界大戦後にまで射程をのばすことのできるテーマであることを明らかにした。本研究の根幹となるプリントカルチャーと文化形成をベースとし、よりスケールの大きな研究成果を得ることができたと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 出口菜摘	4. 巻 44(4)
2. 論文標題 アメリカ詩の体温、彼女たちの横顔 アドリエンヌ・リッチ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 すばる	6. 最初と最後の頁 216-228
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 出口菜摘	4. 巻 28
2. 論文標題 円環の変容—Margaret AtwoodのThe Circle GameとT. S. Eliot	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 カナダ文学研究	6. 最初と最後の頁 43 - 58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Natsumi Deguchi	4. 巻 72
2. 論文標題 Wilfred Owen's Poetics of Pity: Evocation of Emotion through Uncanny Rhyme	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Scientific Reports of Kyoto Prefectural University	6. 最初と最後の頁 15 - 29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 出口菜摘	4. 巻 27
2. 論文標題 被写体からの呼びかけ—Margaret Atwoodの写真の詩学	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本カナダ文学会	6. 最初と最後の頁 81-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 出口菜摘	4. 巻
2. 論文標題 冷戦下に広がる荒地 プリント・カルチャーと詩人の役割	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 四月はいちばん残酷な月 T. S. エリットー 『荒地』 発表100周年記念論集	6. 最初と最後の頁 263-276
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 出口菜摘
2. 発表標題 Margaret Atwoodのゾンビとその手ーフィーメール・ゴシックの系譜
3. 学会等名 日本ポー学会第12回年次大会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 出口菜摘
2. 発表標題 マーガレット・アトウッド作品におけるT. S. エリオットの影響
3. 学会等名 日本カナダ文学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 出口菜摘
2. 発表標題 1948年のT. S. エリオット 不可視化された南部性と詩の効用
3. 学会等名 日本アメリカ文学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------